'97—1・2

北海道民族学会通信

北海道民族学会
〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号
小樽商科大学　津曲敏郎研究室気付
Tel&Fax(0134)27-5424

題　字：椿坂小龍(點の会所属)
編　集：津曲敏郎
発行者：谷本一之
印刷所：㈱北海道機関紙印刷所

1997年度　第1回研究会発表要旨——○　(5月21日　かでる2・7　7階特別研修室)

「編む・組む・織る・刺す」アイヌの生活用品を作る技術の継承と復元

津田　命子*

アイヌはさまざまな生活用品を作るための技術をそれぞれに持っていた。しかしながら差別されたり、和風化が進んだり、近代に入ってからは工業生産された生活用品が入手しやすくなったこともあって個人的に日常の生活用品を作る機会が少なくなった。つまり、製作技術が伝承されにくい社会環境となったということだ。現代においても生活用品の製作技術を伝承したり受け継いだりすることは文化の継承のためにも必要と感じる。技術の継承と復元には次の①から④が重要であると考える。

① 伝承者から教えていただき、そのとおりに製作すること
② ①をふまえて記録映像資料にある技術で製作すること
③ ①をふまえて博物館などの伝世品を復元製作すること
④ ①をふまえて出土品を復元製作すること

①は技術を次の世代に引き継ぐためには不可欠なことである。しかし現在直接学べる技術は幸運にも現代に引き継がれたものという限定がつくし、一伝承者が伝える技術が、伝承者が居住する地域全体の唯一の技術とも決められない。②はすでに故人となった伝承者の技術を現代の私たちが学ぶときに有効である。③と④によって現代に伝わった技術でどのようなモノが作られ、どんな形として残っているのかを知ることができる。それは伝わらなかった技術の存在を明らかにし、そのような技術を復元させることを可能とするものである。伝承されなかった技術を復元するとき現代に継承された材料、作り方、道具の使い方という技術文化を視野にいれるべきで、③と④について製作技術が伝わっていない伝世品や出土品をアイヌだったらどのようにして作ったかということを実際の製作を通して立証する必要がある。今のところ①から④までを考えたが、これを学び修得することでアイヌの生活用品を作る技術を保持し子孫にも伝えることができる。伝統の技術を受け継ぐ必要のなく育った現代のアイヌやアイヌ以外の人たちがアイヌの文化に触れて理解をすすめたり楽しんだりすることができるということである。

いずれにしても何が現代に継承された技術なのか、何が継承されなかった技術なのかを認識することが必要である。文化は人々が暮らしているからこそ生まれ継承され変化しながら成長してきた。言語や考え方と違ってモノを作るためには材料と技術が必要であり、それも伝統の素材と技術で製作できることが最善であると私は考えている。

*北海道立ウタリ総合センター

しかし伝統の素材が入手できなくなったりあるいは安価で大量に入手しやすい材料があったとき、また珍しいものや美しい材料が手に入ったとき誰でもがそれを使用するだろう。伝統の素材を使っていないから伝統のモノとは認めないという意見を耳にしたことがあるが、どのような文化にも材料の置き換えという事柄はある。素材をアイヌ文化に無かった材料に置き換えても伝統の技術で製作するときはアイヌ文化の技術を持って製作されたと認識されるモノができる。アイヌの言葉や暮らし方、儀式の行い方と同じようにモノを作る技術にもアイヌ文化の特徴がある。そのような技術であると考えるからこそ現代に継承された技術と共に伝世品や出土品に使用された技術を学び継承する必要があると思うのである。1991年11月25日、平取町二風谷のKさん宅で「もう40年も前に85歳でなくなった姑の編んだサラニㇷ゚だ。きれいな紐だなァって嬉しそうにしていた」と言って見せてくださったそのサラニㇷ゚にはビニール紐が編み込まれていた。それはどこからみてもアイヌのサラニㇷ゚であった。

アイヌの衣服については昨今の製作者は製図を利用するようになった。製図は材料というより製作のための道具である。また、和裁の技術も入ってきた。技術の変化については否定はしないが次のような点の批判については未だ迷っている。すなわち材料の置き換えがあり技術の変化も起きたとき伝統のアイヌの衣服やモノと言えるのかと考えさせられるのである。先輩諸兄のご意見を賜りたい。

『皇清職貢図』にみえるアイヌの記述について

中村　和之*

中国史料にみえるアイヌの記述は断片的なものが多く、これまであまり注目されてきたとはいえない。しかし、1751（乾隆16）年に、皇帝の命令を受けて編纂された『皇清職貢図』巻3、庫野にみえるアイヌの記述は、中国史料のなかでは最も詳しく検討の要がある。この本は、当時清朝と朝貢関係を結んでいた各地域の人々を、男女それぞれに絵に描き、さらに漢文で簡単な説明を加えたものである。

庫野は東の海島の雅丹・達里勘等の処に居いる。男は則頂心以前の髪を薙り、其の後は蓄え、長びて肩に至れば則に截去る。草の笠と布の衣で、紅い布の卍の字を肩と背の間に綴る。亦た魚皮を衣る者が有る。性は鬪を好み、出は必ず利刃を懐する。婦女は、幼い時に即針で唇を刺し、烟煤を用いて之に塗る。土の語は之を庫野語と謂い、歳に貂の皮を進している。

次に、先年台湾から出版された謝遂『職貢図』は、『皇清職貢図』の漢文・満州文対訳版になっている本であるが、同書巻2の庫野の満州文は以下のような内容である。

kuye, kuye, dergi mederi tun i yadan
クイ、クイ、東の　海　　島　の　ヤダン
darikan i jergi bade tembi, hahasi oci,
ダリカンの　等　の地に　住む。　男達　は、
foron i julergi funiyehe be fusifi
つむじの　前の　　毛　　を　剃り
amargingge be sulabumbi, mutufi
その後ろ　は　のばしておき、のびて
meiren de isinaha manggi uthai hasalambi,
肩　　に　近付いた　ら　直ちに裁ち切る。
orhoi sekiyeku bosoi etuku
草の　編み帽子（と）　布の　衣服（を）
etumbi, fulgiyan boso i araha 卍
着用する。赤い　　布　で　作った 卍

*北海道札幌稲西高校

sere hergen be meiren fisa de
という 文字 を 肩（と）背中 に
hadambi, nimaha i sukū be eturengge
取りつける。魚 の 皮 を 着用すること
inu bi, banin becunure de amuran,
も 有る。気性（は）争い を 好み、
tucike dari urunakū dacun loho
外出する 毎に 必ず 鋭利な 腰刀（を）
ashambi, hehesi oci,ajigen fon ci
帯びる。女達 は、幼い 頃 から
uthai anggai femen be ulme i tokofi
早々と 口の 唇 を 針 で 刺し
ku i ijumbi, ceni ba i ici
鍋ずみ で塗る。彼らの 土地 の 方角（で）
gisurere be kuyedembi sembi,
話すの は クイ語で話す という。
aniyadari seke jafambi.
毎年 貂の皮（を）献じる。

庫野とは、ニブフ語でアイヌを意味する kuγi を漢字の音で表したもので、元代では「骨嵬」、明代では「苦兀、苦夷」と記されたが、清代では「庫野、庫頁」と表記された。またここでいう海島とは、サハリンのことである。雅丹（yadan）とは姓の名であり、この姓にはナヨロのアイヌが属する。達里勘（darikan）は、タライカと考えられる。前頭部の髪を剃り落とす習慣は、アイヌの男性にみられ、サハリンアイヌは北海道アイヌより広く剃りあげるという。草の笠とは、北海道大学農学部附属博物館ほかに収蔵されているイナウカサのことである。衣服につける卍の字とは、アイヌの切り伏せ文様のことと考えられるし、女性の入れ墨も良く知られている。

『皇清職貢図』は、その年代の古さひとつを取っても、近代のサハリンアイヌの文化を考えるうえで、貴重なデータを提供する史料といえよう。

クジラに関わる文化的価値観の対立：国際捕鯨委員会の両極化現象

岩崎・グッドマン まさみ*

1 はじめに

1982年に商業捕鯨全面禁止を決定した国際捕鯨委員会は、それ以降も反捕鯨的政策を維持したまま近年に至っている。鯨資源の回復が科学的通説となった現在、捕鯨問題の本質は「クジラに関わる文化的価値観の対立」である事が次第に明らかになっている。本発表では1991年の国際捕鯨委員会で交わされた議論をデータとして行なった捕鯨問題の文化人類学的考察の結果を紹介する。

1991年にアイスランドで開催された国際捕鯨委員会では、捕鯨問題の本質的特徴が顕著に見られた。作業部会、技術委員会、本会議での議論には一貫して意見の両極化が見られ、多数派である反捕鯨国がいずれの議題に関しても決定権を持つ。これらの両極化現象は常に同じ国の連帯関係を伴い、少数派である日本、ノルウェー、アイスランドなどの捕鯨国に対して反捕鯨国は自らを“Like-minded group(共通の意図を持つ集団）”と呼び、そのメンバー国はアメリカ合衆国、イギリス、ニュージーランドなどとほぼ一定している。

2 両極化の特徴

両極化現象の特徴は二つに要約できる。第1にコンセプチュアルな違いに起因するものである。その例として、鯨資源管理の変遷に関するアイスランド代表とニュージーランドの代表の認識の違いが上げられる。アイスランド代表が1982年の商業捕鯨全面禁止により鯨資源は保護され、今や捕鯨国の問題を協力的に解決しなければならない時であると主張する。それに対してニュージーランド代表はこれまでの資源管理には致命的な欠陥が

*北海学園大学

あり、資源の枯渇に拍車をかけたという認識のもとに、「今度失敗すれば、最後のチャンスを失う」と極度な慎重論を展開する。

もう一つの例は「人道性」に関する議論である。捕鯨国は多くの発言の中で鯨資源の利用者に対する「人道性」という言葉を用い、その重要性を強調する。その一方、反捕鯨国は鯨に対する「人道性」こそが重要であると考えている。つまり捕鯨国は鯨資源に利用者の文化・社会的ニーズを理解する事が「人道性」であり、それが優先すると考える。一方反捕鯨国はクジラと人間の関わりの中で「人道的」である事が優先であるとしている。

これらのコンセプチュアルな相違点をさらに明解にしている議論が鯨資源の“wise use（賢い利用）”と“non-use（非利用）”の対比である。現在国際捕鯨委員会の中心的議題である新しい鯨資源の管理方式の導入をめぐる議論で、捕鯨国は科学的な管理に基づいた鯨資源の“wise use”を主張する。それに対して反捕鯨国であるニュージーランドの代表はクジラの資源量に関わらず、また管理方式の有効性に関わらず、鯨を殺すという行為を許す事が出来ないという発言をする。さらに反捕鯨国は日本の鯨資源調査の提案に対して、目視調査のような非捕殺的な調査方法に対して評価をする半面、捕殺調査に対して反対の立場を取っている。明らかに反捕鯨国が問題にしているのは「鯨の捕殺」という行為の是非なのである。

第2の特徴はこれらの両極化現象は各国の国内政治状況を反映しているという事である。特に組織力の強い環境保護団体や動物愛護団体が国内的に政府に対して多大な影響力を持っている。それらの団体からのプレッシャーにより各国の捕鯨問題に対する政策が大きく左右されている例が多い。これらの団体の代表はNGOオブザーバーとして国際捕鯨委員会に出席し、その影響力を会議中にも充分に発揮する。

3 両極化現象がもたらす結果

1991年の国際捕鯨委員会では「反捕鯨の多数派」と「捕鯨支持の少数派」という両極化現象が繰り返し見られ、本会議で行なわれた6回の投票で確実に多数派が少数派を制するパターンが繰り返された。このような両極化が国際捕鯨委員会の本来の目的である「鯨資源の保護・管理」と「捕鯨産業の健全なる育成」を行なう事を著しく困難にしている事は言うまでもない。この年の本会議の最後にアイスランドが国際捕鯨委員会を脱退する事を表明した。その中で捕鯨条約のもとに成り立つ国際捕鯨委員会が、その目的を果たす事が出来なくなっている事を脱退の理由としている。クジラに関わる価値観の対立により国際捕鯨委員会の機能が極度に低下している事態は深刻である。

失われた千島アイヌの弦鳴楽器について

沖野 慎二*

博物館所蔵のアイヌ民族資料にはそれに付随する情報の乏しいものが少なくない。とりわけ千島アイヌの音楽・芸能に関するものは実物資料もさることながらほとんど不明である。過去のアイヌ文化に関する様々な文献にもほとんど記載がないばかりでなく、かろうじて残された資料（楽器）に関してもその名称や由来、楽器学上あるいはアイヌ文化における位置づけなどは不確かなままである。

本報告は、今からおよそ100年前に千島アイヌが残し、その後伝統が途絶えたパラライキ、バラライキ、ハラリヤー、千島琵琶、蝦夷琵琶…など、これまで様々な名称で記載されてきた、ロングネック（長棹）／洋梨形～三角形の木製胴を持つ三

*北海道大学農学部博物館

弦の弦鳴楽器（ホルンボステル＝ザックス分類法［1914年］による名称で弦の振動により発音する楽器を指す）について、コレクション・ヒストリーを中心にその実像の解明を試みたものである。

これまでの調査の結果、実物資料として現存するものは、北海道大学農学部博物館の１点、市立函館博物館の３点（うち１点は北海道アイヌ製作のもの）の計４点だが、さらに１点、図および写真の記録があり（ヒッチコック　1985）、少なくとも５点実在したことがわかった。

北海道アイヌ製作のものを除いた４点はすべて明治17（1884）年に北千島から色丹島に移住した千島アイヌが所有していたもので、現存する函館の２点（洋梨形とゆるやかな三角形各１点）と北大の１点(洋梨形）は北海道物産共進会に出品後、博物館に納められた可能性が高い。特に、ゆるやかな三角形胴をもつ函館の１点は、千島アイヌ、ケプリアン・ストローゾッフの寄贈品で、当時の函館新聞の記事（加藤　1996）から、明治19年の北海道物産共進会（函館会場）に出品したものとみてほぼ間違いない。また、実物資料の形態／構造の比較の結果、ともに洋梨形胴をもつ北大と函館の１点は同じ製作者（千島アイヌ、パービル・ストローゾッフ）によるものと考えられる。

この楽器はその胴が側板（胴が洋梨形とゆるやかな三角形のものは蒸し曲げ）と平らな裏板で成形された極めて近代的なフラットバック構造をもつという点で、伝統音楽で使用される洋梨形～三角形胴／長棹をもつ「リュート」（棹をもつ弦鳴楽器一般を指す名称）のなかでは特異な存在であり、中央アジアのカザフやキルギスで見られるドンブラやコームズ、ヨーロッパ・ルネサンス期のシターン、現代アイルランド伝統音楽で使用されるアイリッシュ・ブズーキなど少数の例と構造的に近い。また、一般に西アジアに端を発するといわれ、ユーラシア大陸全域に広く分布しているこの類の「ロングネック・リュート」のなかでは最も東に位置している。

バラライキ（パラライキ）という名称から三角形胴をもつロシアのバラライカの直接の影響と思われがちだが、洋梨形胴のものが存在する点や、１点を除いてすべてバイオリンと同じ形態／構造のヘッド（糸倉）をもつことなどから、この楽器は19世紀末期の極東に入り込んでいた“西方の”様々な文化が複合したものと考えられる。

明治17年当時の北千島、占守島について書かれた記録によると（加藤　1996）、千島アイヌはこの楽器以外にも「洋製ノ風琴」（おそらく19世紀前半にヨーロッパで発明され、世界に普及し始めた頃のボタン式アコーディオンと思われる）を所有していた。また、三種類の舞踏があり、一つは北海道アイヌの「鶴の舞」と大差はないが、より躍動感がある、など興味深い記述がみられ、わずかながら当時の千島アイヌの音楽文化の一端がうかがえる。

1997年度　第２回研究会発表要旨――○　（12月13日　小樽商科大学大学会館）

李志恒『漂舟録』をめぐって
－三百年前の蝦夷地の状況とアイヌ文化－

中村　和之*

李志恒の『漂舟録』は、1696年に礼文島に漂着した李志恒という朝鮮王朝（李朝）の下級官吏が著した漂流記である。この貴重な記録は、我が国のアイヌ史・北方史関係の諸研究においてはこれまでほとんど知られてこなかったが、池内敏氏による訳が発表され（「李志恒『漂舟録』について」『鳥取大学教養部紀要』28巻、1994年）、注目を集めている。この漂流記には『福山秘府』や『元

＊北海道札幌稲西高校

禄九丙子年五月十二日、朝鮮人八人蝦夷漂記下書』など日本側にも対応する史料が残されており、近世初期のアイヌ史・北海道史を考える上で重要な史料である。

以下、当時のアイヌ生活文化についての記述を紹介する。衣服については、「みな黄色い衣を着て」「木皮で編んだ黄色い布地の長い服を着て」とあるようにアットゥシを着ていた。また家については、「たしかに7～8軒の人家があり、わがくにの塩を作る人々の塩作り場とたいへんよく似ていた」「彼らの家は塩幕〔塩を作る幕屋〕のよう」との記述があるが、当時の朝鮮の「塩幕」の実体が分からないので、現時点では具体的にどのようなものであったかは明らかにできない。

このほか、「耳には大きな銀環を下げ」「ただ小さな刀をひとつ帯びているだけだった」「それに半把ほどの大きさの木弓、鹿の角で作った鏃をつけた一尺ほどの長さの木の矢など」「網は7～8把を越えるようなものではなく、また、本物の糸で編んだものではなく、木の皮の繊維で編んだものだった」「私に両手をあわせて恭しさを示すところを見て」など、これまで知られている近世後期のアイヌ文化と共通する内容が多い。

また、「また貂皮の服を着ていた人が私の前に近付いてきて、貂皮の服を脱いで、かわるがわるに(二人の服を)指差しながら何かしゃべるので、二人の服を交換しようという意味のようであった。そこで私は自分の着ているものを脱いで交換することにしたところ、彼はたいへん喜んだ。翌日、その土地の人々がそれぞれに毛皮の服をもってきて、我々の服と交換しようという。その数の多いこと、いったい何人ぐらいになるのか分からなかった」など交易に関する記述が多いことが注目される。このほかにも「いろいろな人がそれぞれに干魚を抱えて会いに来た」とあるが、「彼らの家の前には、棹台がいくつもつくられていて、そこに魚がまるで林のように懸けられていた」ともあるので、これらの干魚は自己消費のほかに交易のためにも生産されていたことが分かる。

松前藩が作成した李志恒の所持品リストには、「ソウヤ古衣類ヲ以買取由」と記された「貂皮大小四十枚」と並んで「地龍紋茶色」の衣裳がある。これは、山丹交易によってもたらされた蝦夷錦のことと思われ、蝦夷地に漂着した李志恒は、アイヌとの交易によってこれらの衣裳を手に入れたと考えることができる。

このように、李志恒らはアイヌと活発な交易を行っているが、一行のなかには日本語を解する者が一人いたが、アイヌ語は全くできなかった。それにもかかわらず、さしたる支障もなく交易が行われている。このことから、この「漂流」は、はじめから日本人との密貿易をもくろんだものであったのではないかと考えられる。このことをアイヌの側からいえば、和人との交易に備えて貂皮などの毛皮類と蝦夷錦を用意していたところに、朝鮮人がやってきたので、彼らの衣服と交換したということになる。

『漂舟録』の記録は、1689年のネルチンスク条約後、清朝がロシアとの角逐を抱えながら、辺民支配体制を確立しつつあった時期のサハリン・北海道の状況を知る手がかりになる。また、近世初期のアイヌ史をこれまでとは異なった視点から分析することを可能にし、この時期の環日本海地域の実態を明らかにする上でも貴重な情報を与えてくれるものといえる。

1997年度新入会員

大原由美子、佐藤宏之、スコット・サフト、出利葉浩司、枡谷隆男

事務局移転のお知らせ

1998年度より本学会事務局が下記に移転します。

〒004-0006　札幌市厚別区小野幌　北海道開拓記念館（出利葉浩司）

膜鳴鹿笛の形態分類 －アイヌとマタギの関係を探る－

枡谷 隆男*

アイヌ及び日本の狩猟集団マタギが、秋の鹿猟に用いた鹿鳴に似せた鹿笛は、楽器分類上特異な形態をしている。発表者は膜鳴楽器の吹奏に分類したが［枡谷1994］、他民族に類例がない。

膜鳴鹿笛の形態については、［出利葉1989］、［正林1991］、［高橋1994］がそれを試みているが、いずれも比較資料が限られている。現存する鹿笛約100例と文献を比較検討し、形態分類を試みた。本研究は日本全国を網羅してはいないので、今後の研究で新しい形態が加わるものと期待する。

Ⅰ 膜鳴鹿笛の形態

膜鳴鹿笛は、膜を張る盤面と吹口の形状から、様々な形態がある。盤面の形態は、長方形から楕円形に連続している。アイヌ鹿笛は凸型を基本として角張り、マタギは鐙型（盤面が半円）を基本として曲線を呈している。

1 A型（凸型） アイヌ
2 B型（船型） アイヌ
3 C型（錨型） アイヌ
4 D型（台形型） アイヌ、マタギ
5 E型（鐙型） アイヌ、マタギ
6 F型（楕円形） マタギ（九州）
7 G型（三角形型） マタギ
8 Z型（肩張り型） アイヌ

Ⅱ 膜鳴鹿笛の材料等

鹿笛本体は、アイヌが木製、マタギが鹿角製を主としている。発音膜は哺乳類・両生類・魚類の薄皮を用い、本体への装着は紐の巻付け、膠などの接着、糸による緊縛・編上げがある。

Ⅲ 膜鳴鹿笛の歴史

本州の最古例は縄文後期である北海道は続縄文であるが資料性に疑問がある［枡谷1994］。

1 縄文時代－長崎県上県郡峰町佐賀貝塚出土
2 続縄文時代－恵山町恵山貝塚出土
3 古墳時代－熊本県岱明町年ノ神貝塚出土
4 鎌倉時代－石巻市毛利コレクション

Ⅳ まとめ

膜鳴の吹奏楽器の存在は日本列島に限られる。最古の例は対馬出土のため、朝鮮半島との関係に注目すべきである。鹿笛の歴史解明には、朝鮮半島、ユーラシア大陸の民族楽器研究が必要である。アイヌにおいて松浦［1860］は、久摺では鹿胎膜の膜鳴鹿笛、天塩では樺皮製の樹皮笛型鹿笛の使用を報告している。これは道東ではマタギ、道北ではシベリア諸民族の影響を示唆する［枡谷1996］。

膜鳴鹿笛は本州では中世に諺や俳句季語に使われ、秋の鹿鳴鑑賞の囮笛としての使用例もある。鹿笛の狩猟以外の転用は、日本の神楽やシベリア諸民族の音楽にあるが、アイヌでは確認できない。

鹿笛の形態は、ＡＢＣＺ型がアイヌ独自、ＦＧ型がマタギ独自、ＤＥ型が共通である。形態と使用法との関係、形態に関わる両集団の関係も今後の研究課題である。狩猟用具の材料には、アニミズムの影響で、獲物の一部を多用する。マタギは鹿角と鹿胎を利用したが、アイヌが本体を木製、魚皮を発音膜に多用した理由も、今後明らかにする必要があるだろう。

〈参考・引用文献〉

出利葉浩司 1989 「開拓記念館が収蔵する『鹿笛』について－資料の紹介と若干の私見」『北海道開拓記念館研究年報』17
枡谷 隆男 1994 「世界の鹿笛～楽器のルーツを探る」『美幌博物館研究紀要』2
1996 「楽器学からみた狩猟用具－鹿笛概説（その1）」『アイヌ文化』20
松浦武四郎 1862 『天鹽日誌』
正林 護 1991 「鹿笛考2－縄文鹿笛の形・音・使用に関する復元的考察」『古文化談叢』25
高橋 信武 1994 「大分県九重町飯田高原の鹿笛」『動物考古学』2

＊北海道札幌篠路高校

チュクチ・コリヤクの伝統音楽

谷本　一之*

1967年、民族音楽学者の小泉文夫は、カナダやアラスカでの現地調査の成果に基づいて、狩猟を主とするカナダ・エスキモー(ケープドーセット・カルチュア）と鯨漁をするアラスカ・エスキモー（テューレ・カルチュア）、両者のリズム感のちがいに着目して、「アラスカ・エスキモーは鯨漁という共同作業を経験するので、リズム感がよく、みんなで声を合わせて歌うことが出来、これに対して、基本的には個人の作業である狩猟やアザラシ猟を専ら行ない鯨猟のような共同作業のないカナダ・エスキモーは人々が声を合わせて歌うのは得手ではなく、太鼓と歌のリズムもあっていない」という見解を発表している。ディティールにおいて異なった認識をもちながら、谷本も基本的には生業形態とリズム感との関係について小泉の見解を支持して「アラスカの太鼓やそれに伴う踊りの特徴ー集団的、組織的な性格ーは、ウミアリクと呼ばれる船頭（キャプテン）の下知の下、多数のウミアク（大型皮製ボート）が協力し合って、鯨をとる生業形態の芸能への反映とみることが出来る」（音楽表現と共同体意識）と考えてきているが、カナダ・エスキモーの場合のリズムが合わない、調子をそろえて歌うのが苦手という現象について、それを説明し得る、実感を伴った具体的な情報を得ていなかった。このことに関して、1996年の5月にカムチャツカのパレン村で行なった現地調査で示唆的な情報を得た。夏の放牧地からトナカイの群れと共に一行が戻ってきた時に行なう儀礼に関するものである。

「先ぶれのメッセンジャーが到着すると火を作る。ヤランガ（小屋）の中に儀礼棒を立て、その傍に木の偶像を置く。天に向かって矢を射る。犠牲のトナカイを殺す。皮と頭を（切り離さずに）室内に入れる。頭を火の方に向け、皮を棟木に掛ける。槍を何本か先端を上にして立てる。全部の太鼓を集め、犠牲にしたトナカイの囲りに置く。その太鼓がヤランガの主人から各自に手渡される。それぞれが太鼓を叩き、自分の歌をうたいながらヤランガの周囲をめぐる。その後で茶、酒を飲みマシュルームを食べる。その後でゲームをする。これが2日間続く」。聴き取りと同時に、数名のコリヤクの老媼が実際にヤランガの周囲をめぐる太鼓歌を皆でやるところをビデオに撮ることが出来たが、その太鼓歌は特別にその儀礼のための一つの歌をうたうのではなく、各自めいめいにちがった「自分の歌」をうたっていた。当然のことながら太鼓のリズムもまちまちであった。この儀礼についてはJesup expedition に参加したW.Jochelson の記録がある（Religion and Myths of the Koryak）。Taigonosでの調査記録の中に“Ya'yai-Kamle'lehiynin=[with] drum around going”と記されているものである。

極東シベリア諸族（チュクチ、コリヤク、エヴェン、イテルメン　etc.）やアラスカ、カナダ、グリーンランドのエスキモーに共通する芸能の要素の一つは、各自が、誰かから贈られたものか（親族　etc.）、自分で作ったものかはともかく、自分の歌、自分の存在を示す自分の歌を持っていることである。自分の歌に固執する、このことが、儀礼の場合にもそのための特別の一つの歌があるのではなく、そこでも自分の歌をうたう、結局のところ何人かでうたう場合、現象としてはリズムが合わないことになるが、それは合わせようとするが合わないのではなく、合わないのが本来であるということになる。この現象は小泉説を補強するものであると考えている。

*北海道アイヌ民族文化研究センター